律詩 ― 現代語訳 ―

春望

杜甫

（戦乱のために）都は破壊されてしまったが、周りの山や河はもとのままにある。
この長安の城（まち）にも春は巡ってきて、草木は深い緑をたたえている。
時代のありさまに心を痛めて、美しい花を見ても涙があふれ、
家族と離れ離れになったことを悲しんでは、可愛い鳥の声を聞いても心がおののいてしまう。
敵の襲来を告げる合図ののろしは何か月も上がり続け、
家族からの手紙は、大金に相当するように感じられる。
白くなった髪に手をやると、前よりもさらに薄くなり、
もう全く、冠を止めるかんざしさえ、止められなくなりそうである。

八月十五日夜、禁中独直、対（シテ）月憶（フ）元九（ヲ）

白居易

宮中の美しい高殿や門が深い夜色に静まってゆくころ、
私は翰林院に一人宿直（リシ）して、遠い君に思いを馳せている。
八月十五日中秋の夜、昇り始めた月の光を眺めると、
二千里の遠方にいる君の心情が思われる。
君のいる江陵の役所の東の方では、もやや波が月光を受けて冷たく光っているだろう。
私のいる宮中の浴殿の西側では、時刻を告げる鐘と水時計の音が静かに刻まれてゆく。
（君もこの名月を見ているであろうが、それでも）私はなお心配する。この清らかな月光が、
そちらでは私と同じように見えぬのではないか、と。
君のいる江陵は土地が低く、湿気が多く（じめじめとした土地で）、秋の空もくもりがちだというから。